

自由人の軌跡

近代の文学と思想

大和田 茂

岡野 幸江

藤田富士男

前田 和敏

著者略歴

大和田 茂(おおわだ しげる)

1950年、東京都生まれ。法政大学大学院日本文学専攻博士課程終了。現在、中央学院大学講師。(著書等)『社会文学・1920年前後—平林初之輔と同時代文学』(不二出版)、『宮地嘉六著作集』全6巻(共編著、慶友社)ほか。

岡野 幸江(おかの ゆきえ)

神奈川県生まれ。法政大学大学院日本文学専攻博士課程終了。現在、拓殖大学講師。(著書等)『木下尚江全集』全20巻(共編著、教文館、刊行中)、『銀河鉄道の彼方に—宮沢賢治・作品への招待』(共著、トーテ出版)ほか。

藤田 富士男(ふじた ふじお)

1949年、熊本県生まれ。法政大学大学院日本文学専攻博士課程終了。現在、埼玉短期大学専任講師。(著書等)『ピバ!エル・テアトロ!』(オリジン出版センター)、『伊藤道郎・世界を舞う』(武蔵野書房)、『大東亜舞台芸術研究所』(不二出版)、『大正の演劇と都市』(共著・武蔵野書房)ほか。

前田 和敏(まえだ かずとし)

1952年、兵庫県生まれ。明治大学文学部を卒業。その後、神戸大学で社会学を学ぶ。現在、兵庫県立須磨友が丘高校教諭。

自由人の軌跡

— 近代の文学と思想 —

一九九三年二月三〇日 初版第一刷発行

著者
大和田 茂・岡野 幸江
藤田 富士男・前田 和敏

発行者
福田信夫

発行所
武蔵野書房

国分寺市本多二一九一八

電話〇四三三二一六六〇二〇一/郵便番号一八五

FAX〇四三三二一五八八六二

郵便振替・東京 八一九二二二九

版下作成/風鈴舎

印刷/ミツワ印刷 製本/三水舎

装幀/杉澤清司

不良本は送料小社負担でお取り換えいたします。

定価一、八八〇円(本体価格一、八二五円)

自由人の軌跡——近代の文学と思想——

はじめに

先日、葦原金次郎を主人公とした芝居「將軍が目覚めた時」を見る機会を得た。筒井康隆の同名の小説を島田九輔が脚本化したもので、青年劇場の舞台に、森三平太扮する葦原將軍の悲劇を巧みに演じていた。

金次郎は一八七五年（明治八年）に発病し、八二年より五五年間、「明治、大正、昭和」の三代にわたり、精神病院の中で「將軍」として君臨した人物である。見舞客の高官から贈られた韓国大礼服を着こんだ葦原將軍は、拜謁料をとり、自作の勅語まで発売した。彼の狂気は軍部の目にとまり、戦意高揚に利用され、その言辞がメディアに流された。

一介の櫛職人に過ぎなかった金次郎は、狂気ゆえに乃木將軍をも辛辣に批判したというが、実は彼自身その不遇を逆手にとって、したたかに生き抜いていたようにも見える。事実七二歳の時、彼は正氣に戻っているのだが、逆説的かもしれないが、戦時下にあつて彼こそが自由人だといえるかもしれない。

金次郎のような存在は珍しいが、もちろん真正面から時代に挑み続けた人々も存在する。例えば、森鷗外は日本近代の黎明期にドイツへ留学し、ハルトマンやショウペンハウエルの思想に触れ、ヨーロッパ文明における自然科学の合理精神を受容して帰国した。その後、封建的イデオロギーとの葛藤の中に身を置いて闘い続けた鷗外は、まさしくその一典型であるといえるだろう。軍医と執筆活動という二重の生活に悩みながら、人生の終幕にいたって自分はただ「石見人森林太郎」として死ぬことを望むとの遺言を書いた時、鷗外

は立身出世の呪縛から解かれ、自由人へと昇華した。

木下尚江も、日本の近代の抱えた矛盾を鋭く見据えながら、その矛盾の根源に戦いを挑んだ数少ない知識人の一人であった。普選、反公害、反戦平和、女性解放など尚江の唱えた主張は現代的ですらあるが、半生、一切の権力を否定し、社会活動を辞して隠者のように生きたその軌跡は、彼がまさに本当の自由を求めてやまなかった人であることを語っている。

志賀直哉は学生時代、この尚江らが盛んに取り組んだ足尾鉍毒事件から影響を受け、父と対立し、それがその後の作品の大きなモチーフとなったことは知られている。一見、消極的な選択に見える行動は、家父長制への闘いでもあり、小説家として立つことで彼の強烈な自我は確かな歩をたどることになる。

まだ、留学などというものが一般的でない時代、演劇の勉強のため渡米するという女性がいた。熊本の女歌舞伎一座の娘役として活躍していた木村駒子である。駒子は「明治」の末期、女優として立ち上ると決意し、夫と子供を伴って上京、婦人運動にも参加するが、その後アメリカへ渡り、帰国後は浅草の女優や舞踊家などとして活躍した。ここにも近代を切り開こうとした、一人の女の自由への挑戦が示されている。

一方、同じ明治も末年、欧米留学を終えて帰国した中村吉蔵は、小説家時代からもともと持っていた下層民衆への暖かい視線を戯曲に注ぎ、近代劇確立のために社会劇を次々と書き続けていった。芸術座の活動や大正デモクラシーの台頭とともに、その方向は次第に新しい「民衆像」の形象化へと向かう。吉蔵は描き続けることで、社会の底辺にいる人々に自由への希求を呼びかけたのだった。それは一五年間の紡績工場での体験を基に、特に紡績女工の実態を記録しようとした細井和喜蔵も同様であった。彼は、自分もその最底辺の労働者でありながら、自分の生涯を唯一つのことに賭け、生き急いだ、変わり種の自由人だった、といっ

ていいかもしれない。

ところで「昭和」の初め、石原莞爾は生粋の軍人として、満州事変を企てた。彼は満州国の自治を念頭に抱いて計画したのだが、周囲は意のままにならず、「上等兵」と蔑んだ東条英機の手で閑職へと追いやられた。戦後、東京裁判の進行する最中、「満州事変の中心はすべて石原である。しかるに石原が戦犯とされぬことは腑に落ちない」と酒田市の特別法廷で陳述した石原は、東京裁判に一波乱を企んでいたが、それが「もののふ」としての覚悟の道を示しているようである。

立場は異なるが、日米安全保障条約をめぐる反対闘争の中で全人生を賭して闘った樺美智子も、自ら選んだ人生を燃焼した。また現在もお創作活動を続ける吉行淳之介は、その長い作家生活においてその作風を何度か転換しながらも、一途に性愛の自由を追求してやまない人である。

いささか羅列的になってしまったが、ここに収録したすべての人は、制約を受けることのない破天荒な生涯を送り、あらゆる方面に全人的な力を発揮した南方熊楠に代表されるような、まさに「自由人」を希求し続けた人物たちであったと思われる。いま、彼らの切り拓いた近代の延長に生きながら、それを超えようとするとき、彼らのその生き方が発するメッセージから、私たちは多くの示唆を読み取ることができるのである。

藤田富士男

《目次》

I 黎明と挑戦

- 一、森鷗外とヨーロッパ体験……………前田 和敏 8
- 二、木下尚江の女性論……………岡野 幸江 20
——民法成立前後を中心に——
- 三、木村駒子と熊本女学校……………藤田 富士男 33
- 四、「新しい女」はどこから来たのか……………岡野 幸江 48
- 五、志賀直哉の「処女作」をめぐる断想……………大和田 茂 60

II 躍動と断層

- 一、二つの『剃刀』……………藤田 富士男 70
- 二、川上澄生……………前田 和敏 80
——ある版画家の風貌——
- 三、社会劇作家・中村吉蔵……………藤田 富士男 90

四、レ・ミゼラブル	——『女工哀史』の作家・細井和喜蔵——	岡野 幸江	110
五、断章	薩摩治郎八	前田 和敏	132
Ⅲ 受谷と変遷			
一、石原莞爾	——ある戦略家の満州事変——	前田 和敏	140
二、樺美智子の微笑		前田 和敏	166
三、日本的恋愛小説の一典型	——巨行淳之介『闇の中の祝祭』——	大和田 茂	174
四、私の南方熊楠	——その評価の歴史——	前田 和敏	183
五、山崎正和論	——「柔らかない個人主義」をめぐって——	大和田 茂	197
あとがき		前田 和敏	218

I
黎明と挑戦

一、森鷗外とヨーロッパ体験

前田 和敏

1. はじめに — 鷗外の自己形成 —

人は時代とともに成長する。その生きた時代が一人の人物のパーソナリティ形成に大きな影響を与えるものである。もっとも、人は自分の生まれ出づる時代を選択できないのだが……。

森林太郎鷗外は一八六二年、石見国に生まれた。生家は代々津和野藩主の典医であった。武家の常として幼時は『論語』や『孟子』などの漢学を学んだ。時代は六年後に明治維新を迎えた。鷗外、六歳の時であった。

明治は近代化の時代である。社会変動としての近代化を推進させるものが産業化である。西欧の近代社会の誕生は産業革命を大きな契機としている。これに加え、民主革命、教育革命が近代社会を出現させた。^①日本における近代化もこれらの過程を経て来たが、その特徴は西欧先進文明の影響（ウエスタン・インパクト）があまりに強かったことである。結果、日本の近代化はそのまま西欧化となった。

この変動の時代にあつて、鷗外の一家は旧藩主に従つて上京した。（実際は父と鷗外が先に上京し、祖母、弟、妹などは一年遅れた。）鷗外は西周邸に寄寓し、ドイツ語を学ぶために進文学社に通つた。二年後、規定に達しない年齢を二歳偽り、第一大学区医学校予科（東京医学校）に入学した。学問を志すには、知的な

準備が必要である。日本全体の近代化にも、江戸時代の教育の普及（識字能力）がプラス要素として働いたという。^② 鷗外においても知的な素養の準備が充分出来ていたようである。儒教的な家族制度の中で生きていた鷗外は、一家の期待を背負って医学を学んだ。世は將に近代化の時代であり、ゲゼルシャフトへ移行していたわけであるが、彼は常にゲマインシャフトの心を持った人間であった。明治の気風自体が文明開化の中で立身出世を謳歌していたが、彼も一家の期待を担っていたのであった。知的エリートとして、西欧社会から遅れた日本に方向性を与えようとするナショナリストであり、立身出世の希望に燃えた青年であった。身近な存在である西周こそが、その理想の体現者であった。鷗外は、家族と国家の役割期待を全身で受けとめ、医学により近代化の推進者となろうとした。

鷗外の意識は奇妙な二重構造を持っていた。近代的合理主義と前近代的な儒教倫理（武士的なもの）である。この二重構造は終生変わらなかった。ただ、時として、片方が強く表出することはあったが……。彼は独自のバランス感覚で生きた人であった。また常にバランスを保つ強い自制心を持ちえた人であった。

2. ドイツ留学

鷗外は一八八一年、大学を卒業。陸軍に勤めた。三年後、陸軍二等軍医として陸軍衛生制度調査及び軍事衛生学研究のためドイツ留学を命ぜられた。一八八四年八月、二十二歳の鷗外はフランス船メンザレー号で横浜港を出航した。同行の日本人留学生は十名、憲法学の泰斗として学界に君臨することになる種積八束など以後の日本の近代化を担う錚錚たる人物たちであった。^③ 彼らはそれぞれ、近代日本の役割期待を担った知的エリートであった。彼らは胸に希望を抱き、ヨーロッパを自指した。十九世紀末の華麗なるヨーロッパ

は、彼らにとって将にあこがれの存在であり、理想的モデルであった。そこには、産業革命を経て生み出された近代国家があった。都市の文明があった。時あたかも、ヨーロッパの世紀末であった。落日の前の輝きを持った貴族文化があった。機械文明の萌芽、交通（鉄道網など）の発達等により、都市には多くの人々や富が集積していた。⁽⁴⁾ヨーロッパが自らの文明を最も誇りえた時代であったかもしれない。

そんなヨーロッパに比し、日本は近代化の途上にある東洋の小国である。日本の知的エリート達がヨーロッパ文明に圧倒され、また強い憧憬を抱いたのは当然であろう。さらに当時のヨーロッパの雰囲気そのものが浪漫的であり魅力的なものであった。鷗外は青春の身をこのヨーロッパ（ドイツ）においた。

彼のヨーロッパ留学体験は、一般にドイツ三部作と言われている作品に結実している。「舞姫」、「うたかたの記」、「文づかひ」がそれである。中でも「舞姫」は彼の実際の体験が色濃く反映されている作品である。その冒頭に言う――。「平生の望足りて、洋行の官命を蒙り、このセイゴンの港まで来し頃は、目に見えるもの、耳に聞くもの、一つとして新ならぬはなく、筆に任せて書き記しつる紀行文目ごとに幾千言をかなしけむ」と。実際、鷗外は横浜を出港して以来、香港、塞根^{セイゴン}（サイゴン）を経て、フランスに向かっている。⁽⁵⁾当時、イギリスやフランスの植民地となり、ヨーロッパ風の町並が形成されていた香港や塞根^{セイゴン}で、鷗外は初めて生のヨーロッパ文化に触れたに違いない。⁽⁶⁾ここでヨーロッパの空気を肌で呼吸したのである。

鷗外は「舞姫」の中で太田豊太郎に次のように語らせている。「幼き比^{こぶ}より厳しき庭の訓」をうけ、「我が名を成さむ、我家を興さむ」と思いをいだき、「模糊たる功名の念と検束に慣れたる勉強力とを持ちて、忽ちこの欧羅巴の新大都」に立ったと――。実際の鷗外もマルセーユに上陸し、ベルリンに到着した。一八八四年当時のドイツは、普仏戦争に勝利し、プロイセンを中心とした統一ドイツ帝国が成立した数年後であった。

プロイセンのヴィルヘルム一世がベルサイユ宮殿でドイツ皇帝として即位したのであった。プロイセンはこの頃、首相にビスマルク、参謀総長にモルトケがおり、黄金時代を迎えていた。⁽¹⁾モルトケは軍事上、人員・物資の動員のため鉄道網を整備していた。(モルトケはクラウゼヴィッツの『戦争論』の理論的実践者であった。——クラウゼヴィッツの著書は鷗外が『大戦學理』として後に一部を翻訳している。——)ベルリンの町は、プロイセン軍が先の普仏戦争でナポレオン三世を破った勝利に今なお酔っていた。ブランデンブルク門から凱旋塔のあたりでは、毎日近衛兵の行進が行われていたと言う。『舞姫』の舞台ベルリンは、プロイセン軍国主義の都であった。⁽²⁾この国家の軍事色とは相反して、人々の生活は近代都市文明が生み出した生活様式を享受していた。『舞姫』に描き出されている道行く人々の装いは、「様々な色に飾り成したる禮装をなしたる、妍き少女の巴里まねびの粧したる——云々」とあるように、非常に華やいだものであったと思われる。

近代化の役割期待を担った森鷗外、彼は同時に家族の強い絆を感じていたゲマインシャフト的人間であった。そのゲマインシャフト的人間が、近代ヨーロッパの都市空間ベルリンの中へのみ込まれていった。そこは將にゲゼルシャフトの空間であった。『舞姫』の豊太郎もこのベルリンの都市空間の中で自我に覚醒した。「たゞ所動的、機械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大學の風に當りたればにや、心の中なにとなく妥ならず、奥深く潛みたりしまことの我は、やうやう表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり」と——。近代化途上のまだまだ封建的氣風が色濃く残った日本。武家の儒教論理が強く支配する森家の家風。鷗外は留学によって、これら無数の圧力から一時隔離され、また近代都市文明の華の中で近代の精神を知った。自由な恋愛は近代文学のテーマであり、將に個人的自由の象徴である。豊太郎、そして鷗外もエリスとの恋愛生活の中に溶け込んでいった。この時点では都

市生活者の文化を内面化していたのかもしれない。それが「憂きがなかにも楽しき日」である。だが、豊太郎は自我の覚醒にもかかわらず、再び近代化途上の日本の世界へ戻っていった。結局近代ヨーロッパのゲゼルシャフトの中に完全に同化することができず、明治国家や家族のゲマインシャフトの枠組の中へ帰ってきたのである。恋愛の挫折は、同時に自我の挫折であった。

3. 留学の成熟

『舞姫』の舞台はベルリンであり、そこはビスマルク、モロトケに代表される軍事国家プロイセンであった。一方、『うたかたの記』の舞台は、ミュンヘンであり、そこは一時作曲家ワーグナーが住んだ学芸の国、バイエルンである。バイエルンはドイツと言っても、国王も国民もオーストリアに親近感を持っている国であった。^⑨バイエルンのヴィステレスバハ家とオーストリアのハプスブルク家とは姻戚関係にあった。もっとも、プロイセンのホーエンツォルレルン家とも同じ姻戚関係があるのだが……。ヨーロッパの王室全体が親戚関係でありながら、戦争し合っていたのが西洋の歴史であったのかもしれない。

バイエルン王、ルードヴィヒ二世は特異な王であった。ワーグナーのパトロンとしてバイロイト音楽祭を援助し、またノイ・シュバンシュタインやヘレンキムゼーに代表される中世風の華美な城郭の建築者でもあった。反面、政治の世界をつとめ、国家の経済を破綻させた人物であった。当時隆盛しつつあった精神医学によって、パラノイア（これはエリスの病名と偶然にも同じである）と診断され、国王を退位させられた。一説によれば、政治的策略であったとも言われている。この正否は別にして、ルードヴィヒ二世はベルク城に幽閉され、自殺とおぼしき謎の死をとげている。^⑩

鷗外は、ベルリンに到着後、約二ヶ月でライプチヒに移り約一年、ドレスデンに約十ヶ月、その後ミュンヘンに約一年滞在し、再びベルリンに戻っている。これがドイツでの行動範囲である。ミュンヘンでは、画学生の前田直次郎と親交を結んでいる。彼こそ、『うたかたの記』の主人公巨勢のモデルである。鷗外は軍医として、衛生学研究のためドイツに派遣された自然科学者である。ところが、鷗外はミュンヘンで日本人画家と知り合い、さらに偶然にもバイエルン国王の謎の死と出会った。鷗外は『獨逸日記』、一八八六年六月十三日に、ルードヴィヒ二世の死についてかなりの字数をさき詳しく記述し、衝撃の大きさを示している。また二週間後の二十七日にはルードヴィヒ二世が溺死した湖を訪ねている。ワーグナーの音楽やバロックやロココの美術様式を愛した王は、ヨーロッパの世紀末の頹廢ムードの象徴であった。自然科学者鷗外のロマンチズムが大いに刺激されたのであろう。この悲劇的事件に、原田との交友の思い出が重なり、『うたかたの記』となったのである。ルードヴィヒ二世は芸術の愛好家ではあったが、浪費家で国家財政を逼迫させた王である。昼よりも夜を好み、ルイ太陽王に比し、月の王と言われた人である。自由奔放に生きた王である。近代化の役割期待により、国家と家族への義務感に強く縛られていた鷗外は、全く自分と異なるタイプの人物像として、ルードヴィヒ二世を見つめていたのではないだろうか。彼はこの人物を決して責めてはいない。小説の中で美しく描いている。鷗外の前田直次郎のロマンチックの憧憬がルードヴィヒ二世に凝縮されているに違いない。後進国日本の青年が、ヨーロッパに憧れるのは、まず文明の雰囲気である。明治期、キリスト教が日本の知識人を魅了したのも、宗教そのものの教義よりも、キリスト教がもつ異国的な雰囲気である。ヨーロッパの王権の黄昏に、鷗外は何らかの感慨を抱いていたのであろう。世紀末のミュンヘンの街角――。酒場もあり、カフェもある。新聞も発刊されている。鉄道網も発達している。都市は様々な

話題を人々に提供していた。鷗外も、都市の風に当たり、ミュンヘンの人々と同じ様に、ルードヴィヒ二世に哀悼の意を捧げた。鷗外二十四歳、多感な青年であった。世紀末ヨーロッパは、一方では頹廢的な文化を生み出し、他方では産業革命による機械文明が隆盛しつつあった時代である。鷗外はその中で自己のパーソナリティを形成していたのであった。一八八六年、鷗外がミュンヘンでルードヴィヒ二世の死に出会った年、ニヒリズムの哲学者ニーチェは『善悪の彼岸』を書き、社会学者ジンメルはベルリン大学で講義を始めていた。時代は旧い貴族文化が最後の名残りをとどめ、帝国主義の時代になろうとしていた。鷗外の『舞姫』、『うたかたの記』、『文づかひ』のドイツ三部作には、ヨーロッパ貴族文化の香りが漂っている。それが彼のロマンチズムではないだろうか。彼はヨーロッパの世紀末文化の中から鋭くロマンチズムを感じとったのである。

4. 鷗外と「黄禍論」

鷗外のドイツでの活躍で特筆されるべきものは、地質学者ナウマンとの論争である。ナウマンは一八七五年、政府の御雇い外人として来日した人物である。彼は最初は開成学校で教え、四年後に内務省の地理局で地質調査にあたっている。そして一八八五年、ドイツに帰国した。ナウマンとの論争は、ナシヨナリスト森鷗外の愛国心を示しており、また同時に鷗外の高い学問的、語学的レベルを示している。

論争はナウマンのミュンヘン人類学協会での『日本列島の地と民』という講演に始まった。これはナウマンが日本における十年間の地質調査で各地をフィールドワークした経験などを話したものである。この講演の要旨が新聞に紹介されたものが鷗外の目にとまったのである。ナウマンの要旨は次の通りである。¹³⁾

(1) 婦人は齒を黒く染めるため容貌が損われてみえる

(2) 子供が六歳になるまでひき続いて乳を飲ませるため老け込むのが早い

(3) 日本人の間ではアイヌは軽蔑され半未開人としてほとんど捕虜の如き境遇に生活している

(4) 日本人の発生について支那からさらに詳しい資料が得られるであろう

(5) 日本人が非常な体力と肉体的耐久力を有するにもかかわらず、我々の観点からすれば粗末な食餌を摂っている点は著しく眼につく

(6) 奥地ではほとんど裸で歩いている

(7) 下着や衣服の汚いことは入浴好きとコントラストをなし、伝染病や寄生虫の発生は夥しい

(8) 盲人の数は多く、彼らが巧みにマッサージを営むさまは異様に映る

(9) 日本の将来は「鹽水の中の蛙」

(10) 油絵の導入は日本絵画の衰退をもたらすであろう

(11) 要するに一言にして言えば、ヨーロッパ文化をただそのままに受容するだけでは日本民族は強化されずにかえって弱体化し、遂には民族の没落を招来するであろう

ナウマンは以上の通り、日本を概説した。だがこれは現在の我々が見ても思い込みの多い議論である。鷗外は「日本の実状」、「日本の実状・再論」として反論している。(もっともこの二つの間に、ナウマンの「森林太郎の『日本の実状』」という反論がある) 鷗外は、近代化過渡期にある日本の立場を述べ、民族や衣食住の習慣について一つ一つ例を挙げながら反論している。ナウマンが特殊な事例を一般化している点を訂正し、また視野の狭い点を止し、捏造された現象を指摘している。鷗外は「日本兵食論」を著した自然科学者